

平安朝の貴族の出産に関する儀式

－ 主に『紫式部日記』に基づいて －

ラツコー・ヴィクトーリア

I. はじめに

出産は新しい人間が世界に登場し、生命の最初の出来事でもある。しかし、長い間多くの女性にとっては生命の一番危ない出来事でもあった。安産・母と子の元気・子供の望ましい性別などのために世界中の諸国で今も色々な儀式が行われている。習慣や儀式は時間とともに変わってくるが、どこでも多少がある。

日本も同じである。今日は医学の進化のおかげで、出産は昔より安全になったが、今も神社や寺で安産や子供の元気などのためお守りを買ったり、お宮参りしたりする習慣はいくつも生きている。1000年前の平安京に住んでいた女性たちが産んだ時は医者よりも僧侶がそばにいた。安産や生まれた赤ちゃんが元気で成長するためにどのような儀式が行われたか、一条天皇中宮彰子の出産について詳しく記されている『紫式部日記』をもとにして、調べてみた。

II. 結婚

最近、離婚や自分の決定によってシングルママの数がだんだん増えているが、子育ての一番自然な（と社会的に一番みとめられている）環境は家族である。家族の初めは結婚である。それで、平安朝の貴族たちはどのような結婚をして、どのような家族生活をしていたのをちょっと見てみよう。

この時代の結婚は一般的に見ると、今のと全く違っている特徴をいくつも持っている。

1. 婿取り

妻方居住婚・独立居住婚ともいえるが、当時の日記などに「婿取り」と表現されている。これで婿取り婚と名をつけたが、これは人類学で使われている婿取り婚とは違っている。王朝時代になると、中国から輸入された家父長制が固まりはじめ、結婚についての最終決定権は父が持っていた。これにしても、当事者同士の意見を無視するわけではなく、後世の見合い結婚とも違っている。結婚過程の最初のステップは、男から愛の言葉の和歌を受け、女は返答するかどうか、自分で決めた。女と男が合意したら、必ず女性の父に結婚が申し込まれた。これは欠かすことができない要素であった。婿取り婚では、男は婿に取られた相手によって評価されたので、できるだけ家柄の高い家に婿に取られたがっていた、

特に上級貴族の女性の父が多くの場合では婿を厳選した。政治的な地位は一番大切であったこの時代では、それを持つ、または、それを期待する男が選ばれた。

決定の最終権は女の父が持っているといっても、母の役割も大事であった。

婿取りの典型的な例といえる藤原道長と正妻倫子の場合にもそれがみえる。当時の道長には政治的な地位はあまり期待できなかったし、娘を入内させたがっていたので、倫子の

父（まさのぶ雅信）は結婚を強く反対した。しかし、倫子は十二歳になり、入内することができなかった¹。その上、母は道長を援助したので、結局道長は婿に取られた²。

2. 住居

結婚式の後、若夫婦はしばらく女の親たちと一緒に住んでいて、その後、親、または若夫婦が別居した。住居を見ると目立つのは、どちらの側が引越ししても、夫の親から家屋をもらっても、夫の親たちと同居することは全くなかったのである。しかし、同居している妻は一人だけであり、他の妻立ちに夫が通うようになった。『源氏物語』で見えるような、妻や妾たちは一戸建てに一緒に住んでいるのは、結構珍しかった。

3. 一夫多妻

一夫多妻の習慣はおもに上級貴族にあったが、所々中級貴族の場合にも見える。正式に婿取りをした、または、通うことから公認された妻は二・三人いた。これはもちろん、妻たちにはあまりにも楽しいことではなかった。まず、正妻には他の男との性関係は許されていない。その上、いつもいつも、夫を待っていることしかなかった。妻にとって一番怖いことは夫が通わないようになるということであったので、来るかどうかの不安を感じて、他の妻たちへの嫉妬は絶えなかった。夫は妾も何人も持つことができたが、それについては正妻は問題にしなかった。妻にとって恐ろしいのはもう一人の正式な妻であった。この不安や嫉妬が女流文学の大事な要素になった。

妻たちのなかには元々差がながったと思われるが、九世紀になり、『律令』の官人昇進規定を改変し、政治的地位を男子に継承させるようになった。これで、親子関係を確実なものにするため、女性にはその前許されていた多夫も禁止された。その時から妻たちのランクつけがはじまった。けれど、正妻や次妻、または異腹の子供の差別は、上級貴族のトップのみに見られる。

このような特徴は一般的だといえる。しかし、王朝貴族と同質の階級ではなかった。前

¹ 当時摂政兼家の娘が入った。

² 『栄花物語』第三

に述べたように、一夫多妻の制度はほとんど上級貴族だけに現れたが、その他にも上・中・下級の間には多少の違いがあった。

一番目立つのは年齢である。上級貴族の場合は、若い結婚が一般的であった。結婚相手はまだ子供なで、親同士が結婚を決めることが多かった。もちろん、愛などは、あまり大切ではなかった。これに対して、受領層の場合は、恋と結婚はそんなに区別がなかった。初婚年齢が結構高かったので、お互いに気にいったら、夫が住み付くようになることは多かった。にもかかわらず、夫と同居することはあまりなかった。妻は朝廷の女房で、夫は下向させられるたこともあったが、宮仕えを退き、夫と下向する女もいた。夫は都にいても、受領層のトップにはまだ一夫多妻の習慣があったので、夫を通わせることは多かった。

結婚できない³、または離婚再婚する男だけではなく、独立した生活を続けている女も大勢いた。その主な理由は二つある。第一、離婚再婚は女にも許され、別に悪いこととは思われなかったということである。第二、女性は父母から財産を相続でき、自分の財産を持つ権利があったということで、結婚しなくても生活出来た。この点から見て、平安時代は女にとって性的にも、権利の有無の面でも、後世より自由な時代であった。

Ⅲ. 出産に関する儀式

妻たちが絶えず感じている不安をちょっと減らす方法の一つは期待通りの出産をすることであった。当時、出産はすごく産婦の命に危険であった上に、家族や社会によって色々なことが強く期待されていた。望ましい性別の子供を産んだら、夫が通う可能性が高くなる。もちろん、階級によって期待が違っていた。

上級貴族の場合には、最初にどうしても女子が欲しかった。長女の後、政治的地位を継ぐ男子を待った。道長の正妻倫子はこの期待を見事のように実現した。最初に長女彰子を産み、一条天皇に入内させた。次に、長男の頼道、その後

は男子一人、女子三人生まれた（三人とも入内させた）。
后や中宮になると、最初には男子が期待された。この男子は天皇になり、外祖父は摂政や関白になった。中宮彰子はこの期待に見事に応えた。男子を二人、連続産んだ。道長の大喜びは言うまでもないことである。

受領層、中級貴族や何か専門（例えば大学寮や陰陽道など）がある家は家柄や地位を継承する男子が欲しかった。『紫式部日記』に作者の父（為時）が才能を持つ子供が息子ではなく娘であるのはどんなに残念なことであると思ったかを記録する条はかなり有名である。

もちろん、皆は期待通りに産めなかった。望ましい性別のために儀式が行われたが（後で述べる）、これでもだめだったら、家族、特に父と夫の方から冷淡であった。このことは

³ すなわち、正式結婚をしなかった、または出来なかったという意味。男を通わせることはあったが、社会的に公認された夫婦ではなかった。

清少納言の『枕草子』にも触れている：「すすまじきもの。(中略)博士のうち続き女児生ませる。」(枕草子、二十二段)⁴

これよりも悲劇なのは流産する、または全く子供を産めない、すなわち素腹の女性であった。危険をよく知っていても、出産は大変期待された。これで、その女たちにもものすごい精神的負担がかかった。想像妊娠さえあった。妊娠する女性は安産のため、素腹の女性は妊娠のために寺に参った。子宝の寺である長谷寺は主な目的地であったが、他の寺や神社にも参ったようである。

しかし、前に述べたように、当時の出産はものすごく危なかった。例えば、赤ちゃんが無事で生まれても、後産がうまく行かないなどの理由で大勢の女性が産死した。上級貴族の場合は、幼い結婚のため、若年で出産し、若年で死亡する者が特に多かった。また、貴族の母親は自分の子供を乳母に任せ、出産後すぐ次の子を身ごもるようになった。若年、多産や王朝貴族のあまりにも健康的ではない生活方法を考え合わせると、産死が多かったものは当然の結果といえる。

1. 出産前の行事

うぶや ・産屋

出産の際、妊婦は住んでいる家屋から別の建物・場所に移るのは古代においては日本のみではない。産屋は元々出産のために造られた建物であり⁵、平安時代になり、皇后・中宮は、宮中から出る習慣があり、その出る所が普通には親の邸であった。これは一方産屋の遺習でもあるが、摂関制度が固まった後、生まれた若宮を外祖父の邸でしばらく育てることにより、影響を受けさせて、天皇になったら、より外祖父の影響力をするという理由も考えられる。

・着帯

文学作品では〈しるしの帯〉(源氏物語)〈御帯〉(栄華物語)などと表現されている。〈しるし〉とは、標識の意味で、妊娠のしるしとして妊婦が帯を巻いた。その帯を結ぶ儀式、いわゆる着帯の儀が行われた。宮中を出るのは妊娠後三、四ヶ月、時々五ヶ月となり、その後着帯の儀をした。この儀は出産前の行事の中でも一番重要な儀式とされ、決めたりは色々あった。まずは、吉日を選んだが、この日は書類によってはっきりしていない。儀式が始まり、台盤所から物具を着け、帯が入っている衣箱を持ち、帯を納める。帯を結

⁴ 以下別に記しなければ、岩波書店の日本古典文学大系による。

⁵ 『古事記』、上

ぶ者は夫である習慣があった。もし、儀は宮中の退出前に行われたら、天皇自ら帯を結んだ。結ぶ前には、僧正などの高い位を持つ僧侶が加持を行う。結び方について「もろなわ⁶」と記録されている。その帯には産婦の健康の保持のため、〈仙沼子〉という、丸薬十四粒を中に入れた。

・変成男子

これは仏法の力を使って胎の中にいる女子を男子に変える修法である。特に皇后の出産の折り男子を希求するので、そこで変成男子の法が行われた。この修法は着帯の儀と同時に修された。なぜかという、着帯の時（すなわち五ヶ月ごろ）子供の性をまだ転換できると信じたからである。性を決めるのは夫の座る位置であり、夫は左に座り、男子の出産を祈念した。しかし、「変成女子」、つまり男の胎児を女にばけさせる修法はなかった。

・白の調度・装束

「十日の、まだほのぼのとすに、御しつらひかはる。白き御帳にうつらせたまふ」（紫式部日記（＝紫）、寛弘五年九月十日条）。

これは一条天皇中宮彰子が出産の時期が近づき、母屋の模様を白く変えるという行事を記している。家具などだけではなく、近持の女房の装束まですべて白色に変える。彰子の場合はこの白い几帳は尋常の几帳の東側にたてられた。簡単にいうと、浜床の上に畳み二帖を南北に敷き、四隅に柱を立て、その上に天井として障子をのせる。四隅と四方に絹の帳（冬は厚い、夏は薄いもの）をたれた。白色に変える理由は、出産は古代人の考え方は死と隣あわせだからであろう。

・髪そぎ

「御いただきの御髪おろしたてまつり、御忌むこと受けさせたてまつりたまふほど、くれまどひたるここに、こはいかなることと、あさましうかなしきにたひらかにせさせたまひて」（紫、九月十一日条）。

この儀式は、髪をちょっと切り取り、形式的な出家の儀として出産の直前におこなわれた。しかし「こはいかなること」と記し、女房たちの驚きを表現することからこの儀式は一般の貴族には必ずしも行われてあらず、皇后、中宮などの場合に多かったらしい。

・御産の修法

「不断の御読経の声々、あはれまさけり。（中略）後夜の鉦うちおどろかし、五壇の御修法の時はじめつ。」（紫、九月中旬条）。

⁶ 帯の結び方の一つ。蝶の形に似せて結ぶもの。

医学が未発達時代に難産の時助け上げられるのは医者ではなく、僧侶であるとしんじられていた。これで、特に皇后・中宮の場合大勢の僧侶が産所で仕え、寺々でも安産の祈願がおこなわれた。『紫』に述べられているように、座主・僧正・僧都などの高い僧官を持っている僧侶は多数の伴僧を率いて、五壇の修法、不断経、加持などを行っていた。

・物の怪のかりうつし

「御物の怪どもかりうつし、かぎりなくさぎののしる。」(紫、九月十日条)。

物の怪は死霊と生霊として人の身体的、あるいは精神的な弱り目に移り、人を苦しめるので、悪霊を払うため礼拝によりよりまし(憑人)に駆り移す。よりましは普通には何人がの少女であった。一人ずつ屏風で作った局の中において、局のそばで修験者が大声で礼拝をする。悪霊を払う調伏で陰陽師も参加し、神々に祈った。

出産の時にも修法が行われ、母屋では結構大騒ぎがあった。心配する女房たち、叫ぶよりましたち、大声で読経をしている僧侶 - 皆その一つの母屋に重ねている。彰子の場合、御几帳の東面には内裏の女房たち、西には物の怪の移っているよりまし、南には僧侶、北にある非常に狭い所には中宮の女房約四十人が重ねていた。このような状態で子供を産むのは、今日から見ると、あまりにも大変でちょっとかわいそうに見える。

2. 出産後の行事

うちまき

・散米

「(前略)散米を雪のやうに降りかかり、おししぼみたるきぬのいかに見苦しかりけむと、(後略)」(紫、九月十一日条)。

出産の修法は出産前の行事にのべたが、出産そのものの時や出産後にも行われた。散米も同じである。上に引用した例は出産前の、「(前略)散米をなげののしり、われたかう打ならさむと(後略)」(紫、九月十一日条)は出産後の散米を記す。〈撒米〉〈打撒〉とも。悪霊を払うため米を散らすのは、当時のよく行われた行事の一つである。普通には玄米や白米を用いた。元々は神饌としての行事であり、出産の時にも行われるようになった。出産直後だけではなく、御湯殿の儀(後で述べる)などの散米の例もみられる。このように出産からしばらく時間が経った場合の散米は幼児の身辺を守護するためであった。

みはかし

・御検

「内裏より御佩刀もてまゐれる。」(紫、九月十一日条)。

皇子が生まれたら、宮中から近衛の守が勅使として、産所に派遣され、慶祝の御検を皇

子に与えた。この使御検使、あるいは御検勅使という。この儀式では喜びを示すだけではなく、天皇が皇子を認めるという意味もあった。皇女の時は袴を献じたが、後には皇女にも御検を賜るようにたった⁷。

ほぞ を
・ 臍の緒を切り

「御ほぞのをは、殿の上。」(紫、九月十一日条)。

日本では、『日本書紀』にも見えるように⁸、新生児のへその緒を切るには一般的には竹刀を使った。しかし、竹刀だけではなかつた。銅刀を用いる例もある。このことの面白さは、へその緒を銅刀で切るという習慣は中国にあった。多くの場合この行事は母方の近親、または近持の者によって行われた。

ちづけ
・ 乳付

「御乳つけは、橘の三徳子。」(紫、九月十一日条)。

新生児に初めて乳をあげる儀式である。しかし、これはただの形式的な授乳であつた。実際には選ばれた乳母が乳を与えた。乳付の料も乳ではなくて、甘草から作った甘草湯、蜜でねりあわせた光明朱、牛黄などである。乳付のしきたりをみると、まずは生まれたばかり新生児の口の中から含んでいる血をとるため綿を指先にくるみ、これでふき取る。次に甘草を中指にとって、二合の水に入れ、一合に煮詰めた。このように作った甘草湯を新生児に与えた。次は赤ちゃんの精神を沈めさせると信じられていた朱蜜を与えた。次は牛黄である。この儀式がおわり、人乳を与えた。乳付は形式的には日本化されたが、内容、技術的にはほとんど中国のと同じ、大陸の影響力を強く見せる儀式である。

・ 湯殿始め(湯殿の儀)

「御湯殿は、酉の時とか。」(紫、九月十一日条)。

この儀式は宮中から一般の庭まで、広く行われていた。ただ産湯を使わせることではなく、複合的な儀式である。しかし、出産後の産湯を使わせるとは同じではない。必ずしも出産直後に行われなかつたので、出産後何日も行うこともある。また、一回だけではなく、一日のうち二回、朝と夕に行われた。平安時代には産湯を使わせる役を〈御湯〉〈御湯殿人〉〈御湯殿奉仕人〉などと言い、その時の介添えを〈迎湯〉という。「御湯殿は、宰相の君。御むかへ湯、大納言の君庚子。」(紫、同) 湯殿の儀の時、出産と同じように皆白い装束を

⁷ 『栄華物語』、若水—後一条天皇の女章子内親王の誕生の条

⁸ 『日本書紀』、神代 「時に竹刀を以て....」

着た。「(前略) 宮のしもべ、緑の衣の上に、白き当色着て、御湯まゐる。その桶すゑたる台など、みな白き覆ひしたり。」(紫、同)

めいげん
a) 鳴弦

「弦打二十人、五位十人、六位十人、二なみに立ちわたれり」(紫、同)

和文で「弦打」と。弓に弓弦のみを少しだけ引いて放し、弦を鳴らした。これも悪霊や妖魔などを退散させる呪法であり、広く行われていた。平安時代では弦打が湯殿の儀の時ではなく、臨産、夜中の警護、不吉の日、病気などの、悪霊が移りやすい時にも行われていた。

b) 読書

「書よむ博士、蔵人の弁広業、高欄のもとにたち、史記の一巻をを読む」(紫、同)

弦打とともにおこなわれた。明経・紀伝の博士が一人ずつ漢籍のめでたい部分を読むという儀式である。「夜さりの御湯殿とても、さまがかりしきりてまゐる。儀式おなじ。御書の博士がかりやかはりけむ。」(紫、同) のように見え、儀式のしきたりは前と同じであったが、読書の博士だけ交代した。儀式の時に博士たちが列立したが、読んでいたのは一人のみであった。

かしら
c) 虎の頭

「(前略) 虎の頭宮の内持とりて、御さきにまゐる」(紫、同)

虎などの猛獣は勇気やすぐれた力を持つので、古代中国では呪いによくつかわれ、この信仰は日本にも入ってきた。虎の骨、特に頭や首の骨を戸上などに置いて邪鬼などを払うのに用いた。その上、薬用にもされた。湯殿の儀の折りには産湯に入れて用いてた。犀の角も同じような使い方があるらしい。

うぶやしない
• 産養

「三日にならせたまふ夜は、宮司、大夫よりはじめて、御産養つかうまつる」(紫、九月十三日条)「五日の夜、殿の緒産養。」(紫、九月十五日条)「七日の夜は春宮の権の大夫つかうまつりたまふ」(紫、九月十九日条)

〈正養〉〈養産〉とも。出産の夜を最初にして、そのから三日・五日・七日・九日目には祝宴が催された。この儀式の起源も母子に危ない悪霊を退散させたり、新生児が元気で育つ

ことを祈念することである。宮中、貴族限りではなく、程度には差があっても、一般的家庭にもおこなわれた。当時の公家日記や文学作品でよく出てくるので、貴族生活の大事な行事であったと思われる。

しかし、産養は単なる宴会ではなく、そこでは色々な欠かすことが出来ない儀式を行った。

めぐりがゆ
a) 廻 粥

この儀式については紫式部は何も記していないが、産養の重要な行事の一つである。しかし、公家の日記にはたまにでてくるが、文学作品にはほとんど現れない。この行事は粥を与えることによって悪魔を払ったり、子供の健康や多幸を祈ったりした。また、これは新生児に対する形式的な最初の食腹の意味も持っている。

このしきたりは興味深い。まず、中取り机の一本の脚を寝殿の東南の庭に立て、粥桶などを置き、史生一人そこに腰をかける。座布団一枚を寝殿の南面に置き、〈問口〉の役の者は着席する。〈言口〉を役する五位七人は束帯を着て、中取りに行つて粥を受ける。それを問口のもとに持って行き、問答の詞を唱える。三夜には三回、五夜には五回というように詞を廻る。この詞は新生児の夜泣きをとめさせ、邪魔を払うための形式の詞である。

b) 権学院の歩み

「(前略) 権学院の衆ども、あゆみしてまひれる、見参の文ども、また啓す」
(紫、九月十七日条)

権学院は左大臣藤原冬嗣が創立した藤原氏の子第のための学問所である。氏の長者の家には喜ばしい出来事があつたら、別当は学生たちを引き連れ、祝賀のために静かに歩いて、第宅に出かける習慣があつた。

いろなほし
c) 色直

「八日、人々、いろいろさうぞきかへたり。」(紫、九月十七日条) 「(前略) こよひは、おもて朽木形の几帳、例のさまにて、人々は、濃き打ちものを上に着たり」(紫、九月十九日条)

出産前の白一色の装束などを平常の色に戻したのは、八日以後、つまり九夜の産養からであった。

4. おわりに

ここにのべたのは、平安朝貴族が行っていた多くの儀式・行事のうちほんの少しである。出産に関する儀式はまだあるが、今触れたのは出産前や出産直後の儀式だけにかぎる。この少数の例でも日本人が持っていた信仰と大陸の影響が融会した姿を見ることができる。平安時代は日本の歴史、思想史、文化史上にも独特の時代である。それ以前前に大陸から輸入したものを日本化した時期であり、日本文化の基礎が生まれた時代に住んでいた人々の生活を研究すると、今日生きている日本人の心もよりよく理解できるかもしれない。

参考文献

『紫式部日記』、岩波書店日本古典文学大系

『紫式部日記全注釈』、萩谷朴著、角川書店、1971.

『枕草子』、岩波書店日本古典文学大系

『平安朝の母と子― 貴族と庶民の家族生活』、服藤早苗著、中央公論社、1991.

『王朝の風俗と文学』、中村義雄著、塙書房、1952.